16　障害児教育

自己決定を促す支援のあり方について

ー総合学習「クリスマス会」の実践からー

関　　和　典

1

(1)　はじめに

本学級の児童は，物語を読んだり，お話を聞いたりすることが好きである。児童の全員が物語のあらすじをほとんど理解していて，そのお話のおもしろさを理解していて，そのお話の理解する児童や，大まかな流れを理解して，登場人物の中に自分の好きな物があって，その人物になりきって動作化することを好む児童，さらには，物語特有の音楽や擬態語を覚えていて，それを歌ったり表現したりすることで楽しむことができる児童など，同じ物語を読んでいても楽しみ方はそれぞれである。

このように，物語を読んだり，お話を聞いたりする中で自分たちが表現してみようという気もちになり，それを実際に行うことで，内容をより理解し，楽しみながらお話にふれることができると考えている。本実践では，個々の実態を把握して，その子なりの表現や，配役を認めつつ，楽しみながら物語にふれることを主なねらいとしている。

2　指導の実際

(1)　本単元について

①　劇あそびからクリスマス会へー

本学級では，毎週１時間お話の時間を設定し，そこでいろいろなお話を視聴している。子どもたちが多くの物語に触れ，表現活動を行うことは児童の物語に対する関心を高め，豊かな表現力を培っていくことになると考える。さらに，表現をする際に，自分自身で自分の配役等を選択して演じることによってより一層表現を豊かにするものであると考える。

本単元の教材は，児童が今までに読んだ経験のあるものについて国語の学習の時間に視聴を重ねていき，子どもたちにとって適したもの，また興味関心の高いものについて選択した。本学級が低学年であるという実態から，物語の展開が簡潔なもので，親しみやすい教材が適していると考え，その観点のもとに子どもたちの最も興味の高かった「ないた赤おに」を劇遊びの教材として選択した。劇あそびの指導のポイントとして，以下の３点を考えていくことにした。

- 子どもたちが日常遊んだり楽しんだりしていることを，配役の特徴として組み込んでいくこと。
- 子どもたちがやりたい役を自ら選択した場合，それが仮に配役の中で重複しても複数の配役ができても良いこととすること。
- 子どもたちが考えた台詞や，表現方法を，できるだけその場で取り入れていく形で授業を進めていくようにすること。

このことは，この「劇あそび」が，クラスとしてまとまった表現活動である「クリスマス会に向けての劇づくり」向かうものであると同時に，そこでの表現が，自分たちの達成感や成就感を十分に感じることができるための重要なポイントとして考えることができる。

このように，劇あそびを継続して行っていきながら，発展した単元ー総合学習ー「クリスマス会をしよう」に向かっていくわけである。

② 「クリスマス会をしよう」

劇あそびで児童が十分に自己を表現するようになると，発表の場を求めてくるものである。養護学級では通常12月の中旬に「クリスマス会」という劇を発表したり，保護者の出し物をしたりというお楽しみ会が行われる。児童はこれに向けて取り組みを始めていく。

劇を発表することが，劇あそびと若干異なるところは，やりたい役が重なった場合，自分のやりたい役ができない可能性があり，その中でも積極的な妥協を求められるということだと考える。児童は，自分のやりたいものに対して思い入れがあるので，それを崩すことのないように支援していく必要がある。そこで以下の点を考慮して役作りをしていくこととした。

- 配役が重なった場合は，児童がどんな理由でその役をしたいかをしっかりと把握する。
  (配役そのもののキャラクター，音楽，小道具，その他)
- できるだけ児童の話し合いのなかで一人一役になることを理解するようにする。最後には積極的な妥協によって自分から「やる。」ということが言えるよう支援する。
- 自分の役が演じていて「楽しい。」と思えるような支援（上記の理由等）を行っていくなかで適切な評価をしていく。

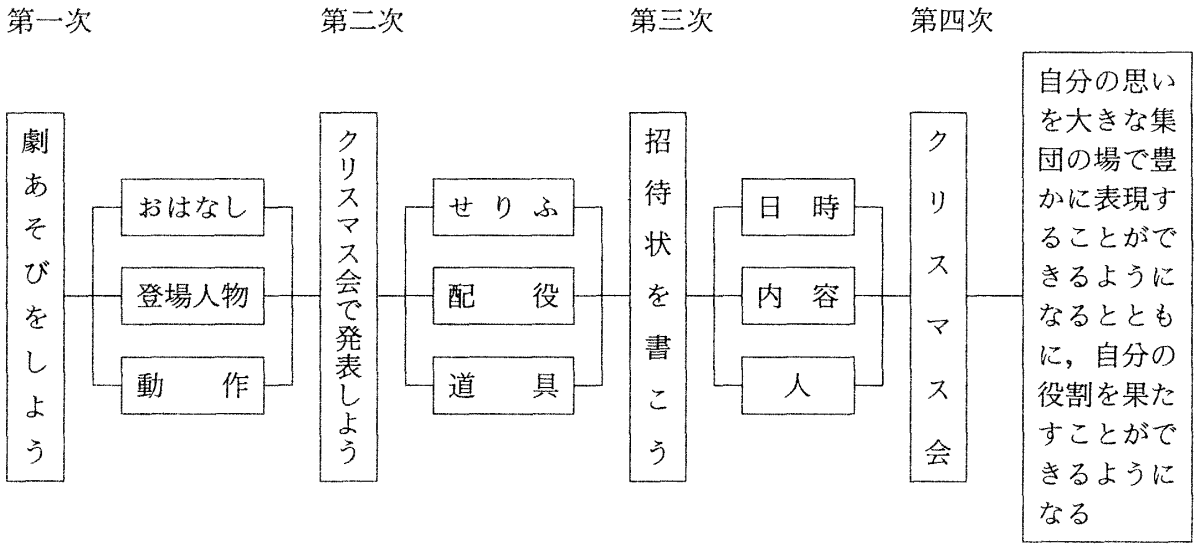
(2) 指導目標

1．自分のやりたい配役を自分で決めて表現することができるようになる。

2．登場人物に親しみをもちながら表現することができるようになる。

3．友だちと共に表現する楽しさを味わうことができるようにする。

(3) 指導内容と計画



3 取り組みの経過

(1) 第一次

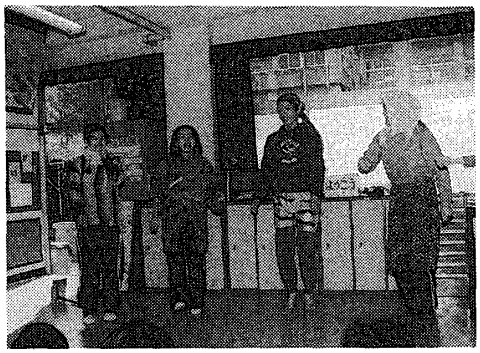
第一次では，いろいろなおはなしの読み聞かせをして，児童が好んでいるおはなしがどういうものなのかということについて考えた。児童個々に好きなおはなしは異なっていたが，大まかにどんなキャラクターが好きかということについては把握することができた。おはなしの読み聞かせの後，児童から「やってみたい。」という声が一番多かった物語について実際に劇あそびをしてみた。このとき，前述したように，配役が重なってもいいこととして児童に自由にやりたい役を表現するように支援していくと，児童は，のびのびと自分のやりたい役を表現していた。また，本年度は，

教育実習とも重なっていたので，実習生と楽しく劇あそびをすることができたようだ。

(2) 第二次

第一次が終わった段階で，おはなしを決めた。児童にいろいろと質問をしてみた結果，「泣いた赤鬼」がいいということになった。

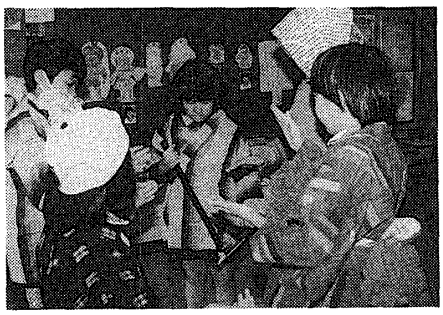
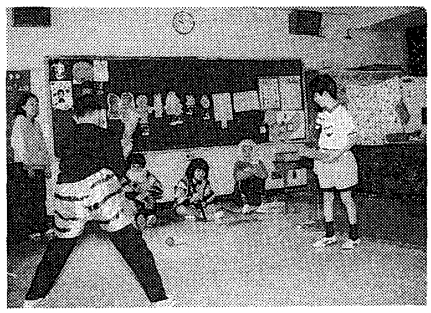
配役を決める際，児童の特徴やキャラクターの雰囲気等を考えて事前に一人ひとりから意見を聞いた。大まかなおはなしの中で自分のやりたい配役がある児童がほぼ全員だったので，その役をすることを想定しながら指導者が劇を師範した。ここでは，せりふははっきりと決めず，児童が実際に劇づくりを始めてから，」児童のつぶやきや実際の動きを劇に取り入れるようにした。また，動くきっかけがすぐに分かるよう，さらには自分たちの表現をよりはっきりとしたものにできるよう音楽や衣装，大道具や小道具を手がかりとしながら劇づくりを行っていった。



(3) 第三次

自分たちの劇がだんだんとうまくいってくると，「お母さんに見せたい。」という子も現れ始めた。児童のそのような気もちに答えるため，保護者宛に招待状を書くことにした。さらには教育実習の先生方にもきてほしいということで自分の配役やがんばるところを手紙にして書くという学習を行った。児童は，「○○先生きてくれる。(かなあ)」と手紙を出した後とても楽しみにしていた。

4 成果と課題

クリスマス会では，児童はとても張りきって自分の役になりきって演技した。招待状を書くことで自分の気もちがとても盛り上がったようである。さらに，せりふを家でもしっかりと練習してきた成果を，劇の中で十分表現できたことで，その満足感，達成感はとても大きかったと考える。

物語の多くは，依然指導者から投げかけられたもので，児童からの発言で決まったものは今の所ない。児童は，毎週図書室で本を借りて読んでいるので，児童の自己決定を促すのであれば，児童が日頃読んでいる物語の中から選択することがあってもいいのかもしれない。今後は，更に児童が自分たちで行っているという実感をもつことができるよう，学習活動を細分化し，児童にまかせる部分をより多く設定していきたいと考える。